

可能構文の対象を標示するガ・ヲの交替に情報構造は影響するか —指示距離による検証—

池田尋斗（関西大学大学院生／神戸大学）

k909064@kansai-u.ac.jp

1. はじめに

可能構文では対象を標示する格助詞としてガ・ヲがともに用いられる。可能構文におけるガ・ヲの交替要因として、これまで他動性（藤村ほか 2004, 青木 2008）、節タイプ（南部・佐野 2019）、動詞の活用型（田村 1992）などが指摘されてきた。

一方で、同じく対象の標示にガ・ヲが使用できる願望構文や「好きだ」を述語とする構文（以下、「好きだ」構文）では情報構造（新情報 vs 旧情報）の影響が指摘されており、対象が旧情報であればヲが使用されやすいという（生田 1996, 池田 2024）。しかし、可能構文におけるガ・ヲの交替について情報構造の影響を指摘した研究は管見の限り見当たらない。

以上を踏まえ、本発表では可能構文におけるガ・ヲの交替に情報構造が影響しているかを用例採集調査によって検証する。なお、可能構文の格フレームには以下の三つが存在しているが、このうち本発表で問題とするのは(1b-c)についてである。

- (1) a. [ニ ガ] 格 : [わたしに 日本語が 話せる] こと
- b. [ガ ガ] 格 : [わたしが 日本語が 話せる] こと
- c. [ガ ヲ] 格 : [わたしが 日本語を 話せる] こと

2. 先行研究と問題のありか

2.1. 可能構文におけるガ・ヲの交替

可能構文におけるガ・ヲの交替については、これまで主に他動性、節タイプ、動詞の活用型の影響が指摘されてきた。以下、それぞれの影響について順に確認していく。

まず、他動性の影響について確認する。他動性の先駆的研究である Hopper & Thompson (1980) は他動性の 10 項目として表 1 を挙げている。ガ・ヲの交替に関しては、他動性の高い特徴を示す文ではヲ、低い特徴を示す文ではガが選択されやすい（あるいは容認されやすい）という傾向が指摘されている。以下に具体的な例を示す。まず、(2b)のように述語に「E.意志性」「H.動作主性」を高める要素が後接すると、(2a)と比較してヲの容認性が高くなるという（青木 2008）。また、述語動詞の意味的特徴によって「I.被動作性」が高いと、ヲの容認性が高くなる。例えば(3)では、強い物理的影響を与えるタイプの動詞「割る」のほうが「食べる」と比較してヲと相いれやすいという（藤村ほか 2004）。また、(4)のように「J.対象の個性性」が低いとガの容認性が高くなることが指摘されている（藤村ほか 2004）。

- (2) a. 休み時間になったら、雑談 {ガ/*ヲ} できる。
- b. 休み時間になったら、雑談 {ガ/ヲ} できるようにしておく。（青木 2008）

- (3) ?あの子はアレルギー体質だ。でもあの子は卵を食べられる。
 ≒ あの子は不器用だ。でもあの子は卵を割れる。(藤村ほか 2004)
- (4) ?保育所に赤ちゃんが任せられるものか。≒コンピュータに仕事が任せられるものか。(藤村ほか 2004)

表1 他動性の10項目 (Hopper & Thompson 1980 より)¹

	高い	低い
A. Participants (参加者)	2人以上: 動作者と対象	1人
B. Kinesis (動作様態, 動き)	動作	非動作
C. Aspect (アスペクト)	動作限界あり	動作限界なし
D. Punctuality (瞬間性)	瞬間	非瞬間
E. Volitionality (意図性, 意志性)	意図的	非意図的
F. Affirmation (肯定)	肯定	否定
G. Mode (現実性)	現実	非現実
H. Agency (動作能力, 動作主性)	高い	低い
I. Affectedness of O (被動作性, 影響性, 受影性, 対象への影響, 動作が対象に及ぶ度合い)	全体的に影響	部分的に影響
J. Individuation of O (対象の個別化, 対象の個体化, 個性)	高い	低い

次に、節タイプの影響について確認する。ガ・ヲが交替する構文(可能構文を含む)について、その交替要因を扱った南部・佐野(2019)は、ガ・ヲの出現傾向を定量的に分析し、従属節のほうが主節と比較してヲの使用頻度が高いことを指摘している。

最後に、動詞の活用型の影響について確認する。田村(1992)は、小説を資料とする用例採集調査の結果から、五段動詞ではガが多く一段動詞ではヲが多いことを指摘している。

以上、可能構文におけるガ・ヲの交替に影響する要因について述べてきた。本発表では、ここに挙げた要因を排除した環境で、情報構造の影響の有無を検証する。

2.2. ガ・ヲの交替と情報構造

ここでは、願望構文と「好きだ」構文におけるガ・ヲの交替について、情報構造がどのように影響しているか確認する。

まず、願望構文について分析した生田(1996)は、述語の中には「開ける」「殺す」「覚える」「待つ」「購入する」などのように「対象の存在を前提としている」ものがあり、このような述語はヲをとりやすいとしている。生田(1996)は、「殺す」を例に挙げて、「何でもいいから何か殺したい」から「では、ハエを…」という状況は(普通は)考えにくく、その辺にブンブンと飛んでいるうっとうしいハエがいるから初めて「(そのハエを)殺したい」と

¹ 日本語訳については角田(2007)に準拠した。

思う、のだという。生田（1996）のいう「前提」というのは、発話の場（あるいは文脈）に既に存在しており、会話の参加者がともに認識している存在という点で「旧情報」と言い換えてもよいだろう。すなわち、対象が旧情報であればヲが使用されやすいということである。

また、「好きだ」構文について分析した池田（2024）では、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ）で得られた用例の情報構造を指示距離という手法（本発表でも用いる、後述）で分析し、ヲは対象が旧情報の文で使用されやすいことを指摘している。

2.3. 問題のありか

ここまでで、可能構文におけるガ・ヲの交替については他動性、節タイプ、動詞の活用型といった要因の影響が指摘されてきた一方で、情報構造の影響については指摘されてこなかったことを確認した。以上を踏まえ、本発表では他動性、節タイプ、動詞の活用型の要因を排除した環境において、情報構造が可能構文のガ・ヲの交替に影響しているかを検証する。願望構文や「好きだ」構文と同様の傾向を示すとすれば、可能構文においても対象が旧情報であればヲが選択されやすい、という傾向が予測される。

3. 調査と分析の枠組み

3.1. 調査方法

国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ）で用例を採集した。(i) - (iv) の手順で分析する用例を選定し²、用例がガ・ヲともに10件以上得られた14種の動詞と意味の用例（表2参照）を分析対象とする。なお、「J.対象の個性性」の要因を排除するため、基本的には対象名詞が無生の用例のみを分析対象としたが、「許す」のみ対象名詞が有生の用例のみを分析対象とした。また、[ニ-ガ]の格フレームをとるものや主語がガで明示的に標示されているもの、「自発」などの異なる意味のもの、情報構造を分析するのにふさわしくない引用文や箇条書きの文・訳文・歌詞・タイトル・慣用表現、さらに対象が疑問詞のものは分析対象から除外した。

- (i) 『日本語基本動詞用法辞典』記載の五段動詞の可能動詞形でガ・ヲが述語と隣接する用例を採集³（「動詞の活用型」の影響を排除）
- (ii) (i) から述語が主節に現れるものを抽出（「節タイプ」の影響を排除）
- (iii) 同辞典の記述に基づいて意味分類⁴（「他動性」の影響を排除）
- (iv) 「B.動作性」「E.意志性」「H.動作主性」を高める要素⁵が後接する用例を除外（「他動性」の影響を排除）

² 三項動詞は分析対象外とした。また、対象名詞句の意味によってガ・ヲの分布が著しく異なっていた「出る」も分析対象から外した。

³ キー=各動詞の語彙素読み AND 活用型：下一段 前方共起=品詞：助詞-格助詞 AND 語彙素：“が”を”

⁴ 同じ動詞でも、動詞の意味的特徴によって「I.被動作性」などに差がある可能性がある。その要因を排除するために意味分類を行った。

⁵ 「～ようになる」「～ようにする」など。

表2 分析対象とする動詞と意味⁶

動詞	意味	例文
買う	お金を払って品物や権利やものを自分のものにする。	株 {が/を} 買える。
持つ	ある考えや, 思い・感情などを心に抱く。	好感 {が/を} 持てる。
言う	口を動かして言葉で表現する。	意見 {が/を} 言える。
使う	ある事のために物を働かせたり, 役立たせる。	携帯 {が/を} 使える。
楽しむ	ある事によって心の満足を感じる。	お花見 {が/を} 楽しめる。
作る/ 造る	ある物・事を原料・材料にして別の事物を生み出す。	料理 {が/を} 作れる。
掴む	物事を自分の物とする。	チャンス {が/を} 掴める。
思い 出す	忘れていたこと, または, 昔あったことなどを記憶に呼び戻す。	名前 {が/を} 思い出せる。
送る	時間を過ごす。	充実した生活 {が/を} 送れる。
許す ⁷	罪や失敗をとがめないで済ませる。	彼 {が/を} 許せる。
選ぶ	いくつかのものの中から, 条件・目的に合うもの, または, 好ましいものを取り出す。	好きなもの {が/を} 選べる。
受け 取る	自分の方へ来るものや渡されるものを手に受けて収める。	代金 {が/を} 受け取れる。
防ぐ	害を受けそうな物事から守る。	乾燥 {が/を} 防げる。
過ごす	何かをしてある一定の時間を費やす。	楽しい時間 {が/を} 過ごせる。

3.2. 分析手法

用例の情報構造を分析する手法として, Givón (1983) の「指示距離 (Referential Distance, 以下 RD)」を用いる。RD とは, 分析対象とする名詞句と, その名詞句の先行詞との距離を計測することによって, 分析対象とする名詞句の「旧情報性」を段階的, 客観的に測ることができるといふものである (Givón 1983, Imamura 2014, 今村 2020)。Shimojo (2005) は, 談話において情報は意識の中で活性化 (activated) されたり非活性化 (deactivated) されたりすると仮定し, 談話中にある語が参照されれば意識の中で活性となり, 参照されなければ後続の発話を処理するにつれて非活性になるとした。そして, RD によって計測されるのは参照語の活性化度 (activation) のレベルであるとしている。すなわち, RD 値が低い語 (直前

⁶ 意味は『日本語基本動詞用法辞典』より。例文は BCCWJ の用例を一部改変した作例。

⁷ 対象名詞が一人称または二人称の用例は除外した。対象が談話の参与者 (participant) である一人称または二人称のものは, その時点で旧情報であると考えられる (Huddleston & Pullum 2002)。このような用例は本発表で用いる分析手法 (詳しくは 3.2.) に向かないと判断した。

に先行詞が出てくる語)は活性化度が高く、旧情報性が高いといえる。なお、RDの最大射程は20節であり、1から20の数値を付与するのが標準的な手法であるとされている(Imamura 2014 など)ため本発表もそれに倣う。以下、具体的な分析例を挙げる。まず(5)の場合、対象名詞「株」の先行詞は(5c)から数えて2節前の(5a)に現れているため、対象名詞のRD値は2となる。

- (5) a. そろそろ株を買いたい気がします。
- b. でも、どうやれば
- c. 【株を買えるの】? (Yahoo!ブログ, OY11_04610, 269)

このように、RDは分析対象とする語とその先行詞の距離を計測する手法であるが、先行詞の認定基準については、Imamura (2014)に準拠した。まず、分析対象とする語の同一指示物が先行文脈にある場合(direct relationship)だけでなく、分析対象とする語と同一のものを指すと推論可能な情報(inferable information)も、それを先行詞としてみなす。例えば、(6)では先行文脈に対象名詞「この武器」という語は直接表れていないが、(6b)の「フェロモンの匂い」は同じ指示対象を指しているという点で、先行詞としてみなす。よって対象名詞のRDは2となる。

- (6) a. 甘酸っぱい芳香が、鼻孔を刺激する。
- b. それは鱗粉に含まれたフェロモンの匂いなのだ。
- c. アブサラスは羽を拡げて初めて、
- d. 【この武器を使える】。(アブサラスリターンズ, LBn9_00139, 79170)

またRD計測においては、文脈上言語化されていない要素を照応するゼロ照応(zero anaphore)も考慮する必要がある。例えば(7)では、(7c)で「牛肉」が直接言及されているわけではないが、二重下線部「ご馳走してくれた」はその対象を必須で要求する述語であり、その対象とは「牛肉」であると考えられる。よって、対象名詞のRDは3となる。

- (7) a. 俺だって、牛肉を食ったのは、上野の美術学校を出て、
- b. 新聞社に勤め始めたとき、
- c. 社長の徳富先生が、ご馳走してくれたのが、最初だ」
- d. 「そらあ、あなたのお父さんが、大酒飲みで
- e. 甲斐性がなかったから、
- f. 【牛肉が買えなかったんでしょ】。(食い食い虫, LBm5_00053, 19150)

以上の基準に基づいて可能構文の対象のRDを計測し、ガ文とヲ文の対象のRD値を比較することで、対象の旧情報性を比較する。可能構文において、願望構文や「好きだ」構文と

同じく対象が旧情報の文でヲが使用されやすいとすると、ヲで標示される対象は先行詞との距離が短い (=RD 値が低い), という予測が立つ。

4. 結果と考察

表3に RD 値ごとの用例数および RD 値の平均と標準偏差, 統計処理の結果を示す。

まず, ガ・ヲごとの用例数の合計に着目すると, 「買う」「持つ」「使う」「言う」「楽しむ」「作る/造る」「掴む」「思い出す」「送る」「受け取る」「許す」ではガが優勢, 「選ぶ」「防ぐ」「過ごす」ではヲが優勢であることが分かる。しかし, ガ・ヲの用例数の差については動詞によって異なりが大きく, 「ガが優勢な動詞」「ヲが優勢な動詞」のように一括りに考えるのは適切とはいえない。本発表では情報構造の影響の有無を検証することに主眼を置くため, この分布の違いにどのような要因が影響しているかについては別の機会に検討する。

次に RD 値に着目する。ガ・ヲの RD 値を比較すると, 「防ぐ」と「過ごす」を除いて, ヲのほうが RD 値の平均が低いことが分かる。ガ・ヲの RD 値に有意差があるかを調べるために, 有意水準 5% で Brunner - Munzel test⁸ を行ったところ, 「買う」「持つ」「使う」「楽しむ」「受け取る」の 5 種の動詞で有意差がみられた (表3 網掛け)。すなわち, これらの動詞ではヲのほうが対象の RD 値が低い傾向があるといえる。以上の結果から, 少なくとも一部の動詞において, 情報構造はガ・ヲの交替に影響を与えており, ヲは対象の旧情報性が高い文で使用されやすい傾向があると考えられる。

次に, RD 値に有意差がみられた動詞に共通する特徴があるかを考えてみる。これらの動詞のうち「買う」「持つ」「使う」「楽しむ」については, 用例全体に対するヲの使用比率が比較的到低い動詞であるといえる。言い換えるならば, 基本的にはガが選択されやすく, ヲは特殊な環境で選択されるような動詞であるということである。このような動詞では, ガ・ヲの選択要因として情報構造が影響してくる, という可能性が考えられる。仮にこのような傾向があるとすれば, その傾向は「好きだ」構文における現象と類似性がある。「好きだ」構文も可能構文と同じく対象の標示にガ・ヲが使用されるが, 可能構文よりもさらにヲは選択されにくいとされている (南部・佐野 2019)。そして, 「好きだ」構文について本発表と同様に RD による検証を行った池田 (2024) では, ヲが RD 値の低い対象の標示に用いられやすいことが指摘されている。すなわち, 可能構文のうちヲが選択されにくい動詞 (と意味) の文や, 構文的にヲが選択されにくい「好きだ」構文においてヲが選択される場合には, 情報構造がその要因として影響している, という可能性が考えられるのである。

ただし, ヲの使用比率が低いにもかかわらず RD 値に有意差がみられないものや, 「受け取る」のようにガ・ヲの使用比率にほとんど差がない動詞で有意差がみられるなど, 上記の考察を支持しない結果も確認されている。この点については今後の課題としたい。

⁸ RD 値の解釈には t 検定を用いることが多い (Imamura2014, 池田 2024 など) が⁹, 十分な用例数が確保できなかったため Brunner - Munzel test を採用した。また統計処理には R (R Core Team (2023)) を用いた。

表3 RD計測結果と検定結果⁹

動詞	助詞	RD 値ごとの用例数					平均	標準 偏差	検定結果
		1-5	6-10	11-15	16-20	合計(%)			
買う	ガ	9	4	3	84	100(88.5)	17.76	5.43	統計量 = -3, df = 13, p < .001
	ヲ	5	1	1	6	13(11.5)	11.38	8.55	
持つ	ガ	9	4	1	237	251(82.0)	19.14	3.62	統計量 = -2, df = 61, p = .02
	ヲ	6	3	2	44	55(18.0)	17.22	6.01	
使う	ガ	26	8	3	101	138(77.5)	15.81	7.23	統計量 = -3, df = 60, p < .001
	ヲ	15	4	1	20	40(22.5)	11.75	8.35	
言う	ガ	50	6	4	36	96(77.4)	9.55	8.46	統計量 = 0.1, df = 48, p = .9
	ヲ	15	3	0	10	28(22.6)	9.14	8.23	
楽しむ	ガ	36	7	6	371	420(73.8)	18.20	5.14	統計量 = -6, df = 189, p < .001
	ヲ	47	9	3	90	149(26.2)	13.50	8.34	
作る/ 造る	ガ	19	10	2	82	113(72.4)	15.84	6.99	統計量 = -1, df = 63, p = .3
	ヲ	12	3	1	27	43(27.6)	14.19	7.97	
掴む	ガ	2	2	2	53	59(72.0)	18.68	4.06	統計量 = -2, df = 28, p = .1
	ヲ	6	0	0	17	23(28.0)	15.52	7.57	
思い 出す	ガ	7	1	0	53	61(70.9)	17.66	5.93	統計量 = -2, df = 37, p = .1
	ヲ	7	0	1	17	25(29.1)	14.84	7.85	
送る	ガ	1	0	1	18	20(58.8)	18.75	4.01	統計量 = -1, df = 17, p = .2
	ヲ	2	1	2	9	14(41.2)	15.85	6.74	
受け 取る	ガ	0	1	0	12	13(56.5)	18.92	3.73	統計量 = -2, df = 11, p = .03
	ヲ	3	2	0	5	10(43.5)	11.80	8.32	
許す	ガ	9	0	1	7	17(51.5)	10.41	8.58	統計量 = -0.8, df = 30, p = .4
	ヲ	9	3	1	3	16(48.5)	7.07	6.97	
選ぶ	ガ	2	2	2	37	43(43.0)	18.26	4.57	統計量 = -1, df = 98, p = .3
	ヲ	10	1	1	45	57(57.0)	16.54	6.82	
防ぐ	ガ	6	3	0	18	27(32.9)	14.74	7.22	統計量 = 0.2, df = 63, p = .9
	ヲ	12	4	1	38	55(67.1)	15.02	7.64	
過ごす	ガ	2	0	0	23	25(29.8)	18.52	5.02	統計量 = 1, df = 24, p = .2
	ヲ	0	0	0	59	59(70.2)	20.00	0	

5. まとめと課題

本発表では、可能構文の対象を標示するガ・ヲの交替に情報構造が影響するかを、RD という手法を用いて検証した。その際、願望構文や「好きだ」構文における現象を踏まえ、ヲ

⁹ 表中の動詞は、動詞ごとの用例の合計数に対するヲの使用比率が小さいものから順に並べている。すなわち、表の上部に行くほどヲの使用比率が低く、下部に行くほどヲの使用比率が高い。

は対象が旧情報の文で使用されやすいという予測を立てた。結果として、一部の動詞において予測と一致する結果が得られた。以上から、可能構文におけるガ・ヲの交替において、情報構造が影響している可能性があることを主張した。また、本調査で情報構造の影響がみられた動詞は、(一部を除いて)ヲの使用比率が低いという共通点がみられることを確認し、「好きだ」構文における現象との類似性を指摘した。

一方、有意差がみられなかった動詞の解釈については課題が残る。現段階では、これらの動詞では本調査で考慮しきれなかった要因がより強く影響している可能性があると考えている。本調査ではできる限り情報構造以外の要因を排除することを目指したが、調査の性質上排除できなかったものもある。例えば、可能の実現条件が外的であるか内的であるか(藤村ほか 2004)という文全体の意味的な要因や、対象名詞の特定性の高低のような連続体として捉えるべき要因などである。また、他動性の 10 項目のうち肯定か否定かを表す「F.肯定」などは、ガ・ヲの交替に影響するかどうかも含めて検証する必要がある。これらの課題を解決するためには、本発表で考慮しなかった要因や除外した用例を含めて、個別の動詞(と意味)ごとに分析するのが有効であると考えている。

参考文献

- 青木ひろみ (2008) 「可能表現の対象格標示「ガ」と「ヲ」の交替」『世界の日本語教育』18, 133-146, 国際交流基金日本語国際センター
- 生田裕子 (1996) 「願望表現における「を/が」の交替について」『人文科学研究』25, 39-72, 名古屋大学大学院文学研究科・人文学研究編集委員会
- 池田尋斗 (2024) 「「好きだ」構文の対象を標示するヲの使用要因—情報構造に着目して—」『日本語の研究』20-1, 35-51, 日本語学会
- 今村怜 (2020) 「後置文の機能的分析」『日本言語学会第 161 回大会予稿集』, 57-62, 日本語言語学会
- 小泉保・船城道雄・本田晶治・仁田義雄・塚本秀樹 編 (1989) 『日本語基本動詞用法辞典』大修館書店
- 田村泰男 (1992) 「可能表現における対象格マーカー「が」「を」について—小説における実態調査」『広島大学留学生センター紀要』2, 11-21, 広島大学留学生センター
- 角田太作 (2007) 「他動性の研究の概略」, 角田三枝・佐々木冠・塩谷亨 (編) 『他動性の通言語的研究』, 3-11, くろしお出版
- 南部智史・佐野真一郎 (2019) 「「が/を」交替の定量的分析」『コーパスからわかる言語変化・変異と言語理論 2』, 289-304, 開拓社
- 藤村逸子・寺島啓子・寺島佳子・萩原由貴子・大曾美恵子 (2004) 「「が」と「を」の交替と「他動性」: コーパスを利用した検証」『日本語学習辞書編纂に向けた電子化コーパス利用によるコロケーション研究報告論文集』, 41-72, 広島大学留学生センター
- Givón, Talmy (1983) "Topic continuity in discourse" *Topic Continuity in Discourse*, 4-41. John Benjamins Publishing.
- Hopper, Paul J. & Thompson, Sandra A. (1980) "Transitivity in grammar and discourse" *Language* 56-2, 251-299.
- Huddleston, Rodney & Pullum, Geoffrey K. (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge University Press. (ロドニー・ハドルストン&ジェフリー・K. プラム, 保坂道雄・長谷川信子・塚本聡・一條祐哉・佐藤健児・小澤賢司 (訳) 『英文法大事典』シリーズ第 9 巻 情報構造と照応表現』開拓社)
- Imamura, Satoshi (2014) "The Influence of Givenness and Heaviness on OSV in Japanese" *Proceedings of the 28th Pacific Asia Conference on Language, Information and Computation*, 224-233. Chulalongkorn University.
- R Core Team (2023) R: A Language and Environment for Statistical Computing. R Foundation for Statistical Computing, Vienna, Austria. <<https://www.R-project.org/>>.
- Shimojo, Mitsuaki (2005) *Argument encoding in Japanese conversation*. Palgrave Macmillan.

参考資料

- 国立国語研究所 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』BCCWJ 中納言 2.7.2 データバージョン 2021.03
<https://chunagon.ninjal.ac.jp/bccwj-nt/search>